

## トスカーナのエリア～キリストの聖体



1月18日に完成した壁画は「トスカーナのエリア～キリストの聖体」という題が付けられた。「トスカーナ」はフィレンツェなどがある中部イタリアの地方名。ルネッサンスの発祥の地である。ルネッサンスとは「再生」の意味。「エリア」は空気や風を表す。つまり「再生の風」ということができる。トスカーナ地方の丘陵地帯。そこに吹く風、雲、糸杉、そして光…。それは神の天地創造をも思い起こさせる。中央には最後の晩さんを記念するミサで用いられる「聖杯とパン」。これはイエス・キリストの「聖体」を表している。イエスの体（肉）と血。ミサの中で「聖杯のぶどう酒とパンは聖体になる」というのがキリスト教の主な教義である。信者はその聖体をいただいて食べる。

この「聖体」が肌色と赤（血色）で塗られていることには必然的な意味がある。神が人となった。わたしたちと同じになられた。裸で生まれ、裸で死んでいった。神の世界は、色でいえば「真っ白」。最初、九十九氏は白壁の上に白で描こうと思ったが、できるはずがない。白色が肌色になった。神に一番近い

色は肌色ということが出来る。わたしたちは裸で神と出会うことができる。飾ることのない自分。ありのままの自分が神に受け入れられる。そして、神はそのような人の食べ物となってくださった。そうして、わたしたちは神が自分と共にいてくださる方であるということがわかるようになった。

この聖堂の中にいると、とくに真ん中あたりにいると、何かに包まれているような温かい感じになる。居心地がよく、いつまでもそこにいたいと思う…のは私だけだろうか。壁に描かれた「肌色の聖体」をじっと見つめていると、心が温かくなる。中央の小さな点はキリストの血を表す。この点にすべてが集約されている。この点から聖堂の外に出ていくような感じもする。世界の中心のようにも思えるし、自分の心の中のあるような気もする。九十九氏によれば、この点は、この聖堂の中にいる一人ひとりの「魂」だという。肌の色も血の色も18日の朝の光の中ですぐに生まれた。よく知られている福者コルカタのマザー・テレサは、最も貧しい人の中にキリストを見、そのキリストに仕えた…。